

## 【 会員投稿 】

## フクシマ原発 やじ馬かわら版 (第1話)

岡島 清二

## ○無関心は非関心にあらず・原発事始め

あの3.11から早半年余が過ぎた。これまで原発に全く無関心であったが、以来興味津々となる。因みに孫正義社長や女優吉永小百合等の知的著名人も、無関心だったことを悔やんでいることを知り、親しみを感じつつ納得。そこで、にわか仕込みの知見を同様な思惟ある会員に少しでも参考になればと、恥を省みず投稿することにした。貴重な紙面を汚しますが笑読し、批評頂いただけなら幸いです。

原発1号機爆発の瞬間映像、あれは読売カメラマンの特撮・大スクープで、朝日はこのテレビ映像を翌日のトップ記事にした。同棒記者として屈辱に涙したものと察する。一方、この一瞬から原発に関する何もかも全てが一変した。東電幹部や政府保安院の虚ろな会見態度が相乗し、世界中を恐怖と不安の渦に巻き込む起点となったのである。小生やじ馬なりの懐疑心と苛立ちが湧き、テレビ・新聞に没中、更には雑誌・書籍を読み漁った。過去無関心で、そして普段から時間を持て余していた分、思い入れは半端でなかった。「日本が何故原発大国となったのか」「核燃料サイクル・プルサーマルとは」「プロトニウム・もんじゅ」「原子力村」等々学んだ・・が「反・脱・縮」原発を論ずるにはまだまだ見識不足、更なる牛歩を続けたいと思っている。

## ○事故の連鎖反応、そこに重大裡潜む

水素爆発の瞬間、10年前の9・11同時テロの映像が蘇る。2機目が突っ込んで数時間後、ツインタワーが突然崩壊した。フクシマ原発同様悪夢の映像第2幕が、全世界に曝された瞬間であった。表向きの原因究明とは別に、脆弱なビル構造に大ナタが入ったことはあまり知らされていない。フクシマは1号機に続き翌13日には、プルサーマルを開始していた3号機も水素爆発を起こし、「冷やす」に続き原発最後の砦「閉じ込める」にも失敗した。水素爆発の破壊力は「温水器F対策」の事故現場に関与した者は何となく想像できる。東電もF対策に深く関わっていた。然るに何故無策・・大きな疑問が残った。いくつか書物を読み解くと、柏崎刈羽原発はこのような緊急時、建屋の壁が吹き飛ばようになっていて爆発は抑止できる。中越沖地震でこの外壁が飛んだ事実があったよとの記事も読んだ。・・ということは放射能が漏れた？しかしマスコミ報道はなかった。東電が発表或いは内部告発がない限り、記者も知るすべはないようである。これが原発の怖いところである。フクシマは40年前に建設されこのような機能はなかった。当時は地震のない米GE社の基本設計そのままであった。いずれにしても原発事故は氷山と同じで、隠れた領域の方が大きいのである。勿論この遠因には、これまで多くの世論が無関心で原子力村の専門家任せにしてきたことと無縁ではないと考える。

因みに水素爆発に至った真の原因は津波以外にあるのでは・・真の技術屋による今後の解明に期待したい。

## ○原発余話・結び

「Not In My Back Yard」略して「N I M B Y」ニンバイと読む新語がある。「必要性は認めるしかし我が家の裏庭に造られるのはゴメン」と訳す。まさに原発推進者の腹の内而我々第三者の心境でもある。

我が国を原発大国に導いた功労者に中曽根康弘元首相と科技庁初代長官の正力松太郎元読売社主が挙がる。対峙する反原発専門家としては、故高木仁三郎原子力資料情報室元代表が筆頭で前橋市の出身である。原発推進と反対派の両雄に、郷土の大先輩が活躍していたことに何か因縁を感じる。他方、読売は第五福竜丸事故のスクープ報道で、核実験反対世界運動の起爆剤となった。読売には原発に対する使命感が脈々と流れているのかも知れない。日本の技術と努力も時流を無視できない。フクシマ原発は大きな潮目になった。そうは言っても何は兎も角、政府保安院や原子力安全委員会の専門家、東電とその関係者(特にフクシマのサムライ所長)に事故収束に頑張ってもらい、やじ馬は影ながら応援するしかない。しかし今後は決して無関心ではいられないことだけは確かである。まだまだ書き綴りたいこと山ほどあるが・・

第1話了 (2011.8.9 長崎原爆記念日)

**追記** : 投稿後会報掲載までに都合あって数ヶ月経過し一部改変した。又8月頃から脱原発依存の書き下ろし書籍が続々と出版された。特に原発圧力容器と格納容器の日立・東芝元設計者の著作は東電発表のデータを基に技術的解析を展開していて圧巻である。第2話では3.11後発刊の小生感銘を受けた書籍と内容を紹介したいと考えている。(2011.10.22 記)

### <中学校の数学> 中学1年の方程式の応用問題 (方程式をたてて答えなさい)

花子と由美がおはじきを30個ずつ持っている。花子が由美に何個かあげたら、花子のおはじきが由美のおはじきの数のちょうど半分になった。花子は由美にいくつあげたのか。